
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 87

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1721. ネットワーク的なテキスト読解
- 1722. 試験の意義とその向き合い方
- 1723. 誤った学習方法に無自覚に従事する私たち
- 1724. ネットワーク的な知識の再編成実践
- 1725. 「学習理論と教授法」のコースの最終試験を終えて
- 1726. 寒さの厳しい朝に
- 1727. 音楽の言語世界
- 1728. 寒い夜の夢
- 1729. 儚さと美しさ
- 1730. ライトブルーの空が伝えるもの
- 1731. 美的体験の造形へ向けて
- 1732. 演奏記号と化粧
- 1733. 二つの印象的な夢
- 1734. 越冬へ向けて
- 1735. ある仮想通貨への応援
- 1736. マネーアタッチメントとマネーパス
- 1737. 身体感覚と学習
- 1738. 曲の構成に関するメモ
- 1739. コード進行に関する疑問の解決
- 1740. 仮説的作曲実践

今日も気付けば早いもので、一日が終わりに差し掛かっている。今日は普段より遅めの起床の後、明日に控えた最終試験に向けての学習を進めていた。明日の試験は、「学習理論と教授法」というコースのものだが、これまで計画通りに学習を進めてきたので、当日の試験についてはもう心配はいらないであろう。

来週の木曜日には、「評価研究の理論と手法」のコースの最終試験がある。こちらは、課題論文は一切なく、その代りに、二冊の専門書が課題文献となっている。二つの書籍の中身は非常に濃く、試験範囲は二冊の内容のほぼ全てに及ぶので、念入りの準備が必要となる。今のところ、コースの前半に取り上げられた一冊の書籍に関しては、その内容の大半を自分の言葉で説明できるようになった。しかし、コースの後半で取り上げられたもう一つの専門書については、これから何度も繰り返しテキストを能動的に読み込んでいく必要がある。正直なところ、今回のコースで取り上げられた概念の数があまりにも多岐にわたるため、工夫をしなければ、それらを頭に入れることはできない。

以前に言及したように、テキストの字面を追いかけるだけの読み方を何度行っても全く意味がない。とりわけ、今回の試験で課せられているように、無数の概念の意味を自分なりの言葉で説明できる必要があり、研究手法と研究デザインの理論について深い理解が要求される場合、そのような受動的な読み方を採用しては全く効果がない。そのため、能動的な読み方を徹底して行う必要がある。

幸いにも、「学習理論と教授法」のコースを通じて、能動的な読み方について考える機会があり、その方法に関するヒントを豊富に得た。とりわけ現在特に意識しているのは、テキストを音読する過程の中で、絶えず自分に説明していく方法である。音読をすることは、黙読と比べて能動的であるが、単に音読をしているだけでもまだ受動的である。そこで私が行っているのは、音読の合間合間に自分の説明を加えるということである。

一つか複数のセンテンスに対して音読を行い、その後に、それらを自分の言葉で言い換えるということを行っている。自分の言葉で言い換えることができれば、そのセンテンスの内容の本質については理解できていることになり、逆に言い換えることができなければ、そのセンテンスの内容理解は

浅いと言える。さらに能動的には、自分なりの言葉での言い換えの後に、問いを立て、その問いについても自分なりに答えてみるということは有効だろう。

さらには、自分の過去の体験や既存の知識と結びつける形で、センテンスに関する具体例を挙げることも有効だろう。しかし、こうした能動的な読みを行っていても、まだ不十分な感覚が自分の内側にあった。それほどまでに、「評価研究の理論と手法」のコースで課せられている二冊の専門書の内容を我が物とすることは難しい。

そこで私はさらに能動的な読みを行うために、テキストに記載されている重要な箇所を自分の言葉で文章にするということを行い始めた。ここでもポイントは、テキストのセンテンスをそのまま抜き出すことは全く意味がないということだ。自分の言葉で言い換えるということ、つまり、自分の頭で意味を解釈するという作業を挟まなければならない。

センテンスの内容の意味を汲み取り、自分の言葉で文章を書いていくという行為は、実に能動的である。だが、それでもまだ自分の脳が十分に活性化しているとは言えない感覚があったため、古典的な手法だが、マインドマップのツールを用いることにした。やはり、自分の言葉で文章を書き連ねているだけでは、後々にそれを見返す際に、非常に不便である。文章は線形的な形となって現れるという性質があり、それは脳の非線形的な特性とは相容れない点である。

視覚的にも脳を刺激するために、テキストの要点とそれらの関連がわかるように、ネットワーク上に要約をしていくことは、とても効果があるように思える。脳の性質の一つとして、ネットワークというのは鍵であり、その性質に合致した形でネットワーク的に要約をしていくことは、とても効果があるだろう。

この実践は、概念のネットワークを構築する上で非常に効果があるように思うため、今回の試験のためだけではなく、今後論文や専門書を読む際にも実践したいと思う。こうした能動的な読みを心がけなければ、私たちの脳は依然として不活性のままである。テキストの内容を自分の言葉で言い換え、それらをネットワーク的に整理していくということを手間だと思わず、これは自分の習慣にしなければならないだろう。2017/10/31(火) 21:25

Now I understand why my music tends to lack melodic structures. The main reason is that a soprano line often contains many leaps. Although leaps are allowed in a soprano line, they should be avoided to be used many times. On the other hand, many leaps are acceptable in a bass line. I will create a four part harmony today based on this founding. 10:34, Friday, 11/10/2017

1722. 試験の意義とその向き合い方

今朝は六時前に起床し、六時半あたりから仕事を開始させた。早朝の闇の景色を眺めていると、サマータイムも終わり、いよいよ冬がもうすぐそこまで近づいているのを感じる。

今日は午後から、「学習理論と教授法」のコースにおける最終試験がある。こちらの試験は、コンピューターを用いたこれまでの多くの試験とは異なり、手書きで回答することになる。手書きの自由記述式試験を受けるのは、昨年に受講していたダイナミックシステムアプローチに関するコース以来のことである。今回の試験は、三時間という長丁場であるため、うまく集中力を保っていききたいと思う。

試験会場は、これまでの試験で用いられていたザーニクキャンパスではなく、街の中心部に近い市民ホールのような場所で行われる。その場所に行くのは今回が初めてのため、余裕を持たせて自宅を出発したい。

午後からの試験に向けてやれることは全てやったので、午前中は最終確認に留めたいと思う。具体的には、試験で取り上げられる論文の内容を自分の言葉でまとめた資料をもう一度読み返しておきたい。また、今回は論文や講義資料の持ち込みが可能な試験であるため、試験の問いを見た瞬間に、どの論文を参照すればいいかをすぐに閃くことができるように、各論文の見出しテーマだけをもう一度確認しておきたい。

教育学において、試験というのは大きく分けると二種類のものが想定されており、今回のような試験は、「総括的テスト」と呼ばれるものに該当するだろう。これは、学期末などに行われるテストをイメージするといいい。その学期内に学んだ内容を、一括して評価するようなテストが総括的テストだ。それは、次への学習につなげるというよりも、最終的な学習成果を把握するために行われるテストだと言

い換えることができる。一方で、「形成的テスト」と呼ばれるものもある。こちらは総括的テストとは異なり、学習の最後にテストを受けるのではなく、学習過程の中で逐一行われるテストのことを指し、その目的は、学習者の現段階の学習成果の把握とそこからの学習支援の軌道修正を行うことにあ

る。

振り返ってみると、今回の試験に向けた準備の過程で、学習項目を自らに説明するという自己確認を絶えず行っていたため、知らず知らずのうちに、形成的テストのようなものを自らに課していたことに気づく。今回のコースの中のある論文にも記載があったが、絶えず自分の学習成果をモニタリングしていくことは、重要な学習方法であるため、論文の内容を実践に移していた自分がいることに気づく。学習過程の中で絶えず自分に説明するようにテキストを読み、自分の言葉で文章を書いていくことの意義を再確認することができる。

一年目のプログラムの最後の試験は、確か五月に行われたため、半年ぶりの試験となる。当然ながら程よい緊張がありながらも、不思議な高揚感がある。試験が持つ意味を考え、その意義に気づくとき、試験を学習過程の中に組み込むことがいかに大切かがわかる。

今日の午後からの試験は、確かに総括的テストの様相を強く持つが、学習者としてできることは、今日の試験を通じて最終的な学習成果を測るだけではなく、さらに次の学習につなげていくように今日の試験を活用していくことだ。2017/11/1(水)07:03

No.367: Quizzes as Formative Assessment

I finished reading “Fundamentals of writing four-part harmony (2016)” in the morning. The author’s book series are quite beneficial for my music composition in that they solidify my knowledge and skills of how to compose music. The book is rather short, but the essence of four-part harmony is covered sufficiently. After reading it, I came back to the author’s “Music Composition 1 (2014).” I am answering quizzes and doing assignments in each chapter this time. Quizzes play a role of formative assessment to check the current level of my understanding.

The more I engage in educational science, the more I appreciate the effectiveness of quizzes and assignments embedded in the process of learning. 15:28, Friday, 11/10/2017

1723. 誤った学習方法に無自覚に従事する私たち

早朝のフローニンゲンはめっきり寒くなったが、今朝の自分の内側は熱気に満ちている。最終試験が今日に行われるためだろうか、昨夜は少しばかり興奮している自分がいた。肯定的な意味での興奮が今も続いており、それはどこか高揚感にも似ている。

オランダの研究大学院における試験は、内容と共に評価が非常に厳しく、好成績を収めることはとても難しいのだが、試験に向かうまでの準備がいかにも大変であろうとも、この歳になると試験の持つ独自の意味に気づくものである。いや、試験そのものの持つ意味ではなく、試験に向かう準備を含めて、それらが学習成果にもたらす意義は計り知れない、と述べた方が正確だろう。

いったい自分はいつから学生を始めたのだろうか。よくよく考えてみると、今から25年前に初めて学生としての社会的側面を自己に持たせることになったのだと思う。そこから今に至るまで、様々な学校で多様な学習項目を学んできたが、つくづく、いかに学習項目を学ぶかという方法論については一切教育を受けていなかったように思う。多くの場合、教育というものが、コンテンツの提供に留まっており、コンテンツをどのように学んでいくか、つまり、いかに学びを深めていくかという方法論を教えることが決定的に欠けているように思うのだ。

「学習理論と教授法」のコースで取り上げられていた論文にも記載があったが、私たちのほとんどは間違った学習方法に従事している。より事態が深刻なのは、間違った学習方法を正しい学習方法だと思い込みながらそれに従事し続けているということである。

ここ数日の日記にも書き留めていたように、例えば、受動的にテキストを黙読で繰り返し読むことは、そうした間違った学習方法の一つだろう。私もこれまでの人生を通じて、知らず知らず、そうした誤った学習方法に長らく従事していたことを最近になってようやく気づく。

これまで行っていた学習は一体何だったのかと反省させられるぐらいに、これまでの学習方法は効果の薄いものであったことを思い知らされる。今私が行っているのは、まさにこれまでの学習方法を根本から見直すことであり、それはある意味、アンラーニングという言葉が当てることができるだろう。だが、これまで何十年も続けていた受動的な学習方法から能動的なものに切り替えていくことは、すぐにできることではない。その習慣が悪しきものであっても、良きものであっても、ひとたび習慣に

なったものを変えるのは、生半可なことではない。また、私たちは本質的に怠惰であるため、受動的な学習を無意識的に行ってしまいがちである。しかし、私たちの脳は、そうした学習では活性化されることはなく、学習内容が真に我が物になることはないということを肝に銘じておく必要がある。

正しい学習方法とは、少なくとも脳が活性化されるもののことを指す。能動的に学習項目と向き合うことが、その第一の条件となるだろう。

今日の学習においても、テキストの黙読ではなく、音読を行い、しかもそれを単なる音読ではなく、自分の言葉での言い換えが適宜挿入された自己説明的音読を行っていく。さらには、学習項目の中で、自分の実務や研究に直結する重要なものに関しては、自らの言葉でテキストの内容を文章にしていくことが重要になる。

昨日から再び始めた実践だが、単にワードなどに文章としてまとめるのではなく、ネットワーク的に知識項目を関連付けていく工夫が大切になると感じている。マインドマップというのは古典的な手法だが、それを用いながら、テキストそのものをネットワーク的に配置し直し、ネットワークの各ノード（結節点）には、自分の言葉で要約されたセンテンスが要素として盛り込まれるような学習方法を採用する。

昨夜実験的に、その実践を行い、就寝前にそのネットワークを再想起したところ、要素そのものに対する記憶のみならず、要素間の関係性、そしてネットワークの構成と全体の意味が非常に鮮明に思い出すことができた。やはり、脳の特性に関する理解を深め、その特性に合致した学習方法を採用していくことが非常に大切なことを改めて思い知らされる。

脳を活性化させながら学びを深めていくことは、受動的な詰め込み学習のような苦行とは一線を画すものであり、学ぶことに伴う本質的な喜びと充実感をもたらすのみならず、それが成果として結実していくことを実感することになるだろう。学習によって、自分の脳が喜ぶ姿を見ていると、それは自分の精神と魂の喜びにもつながっているようだ。2017/11/1(水)07:32

No.368: Music Scores and Melodic Lines

As I read insightful books and articles everyday, I will open pages of some music scores of master pieces everyday. Of course, I will do it as mindfully as possible, but I will sometimes just see some scores without thinking anything.

Sophisticated music scores will cultivate my sense of music. As I mentioned in the early morning, I will closely pay attention to melodic structures when I compose music tonight. Without too many skipwise motions, I will formulate a melodic line with stepwise motions. My attention will be paid to melodic lines for a while. 19:45, Friday, 11/10/2017

1724. ネットワーク的な知識の再編成実践

昨日から意識的に行い始めた学習方法は、非常に効果があることをすでに実感していることを先ほどの日記で書き留めた。振り返ってみると、その原型のような学習方法は、今から三年前にロサンゼルスに住んでいた頃に行っていたことを思い出す。当時の私は、大学機関に属することなく、在野で日々研究を進めていた。その時に行っていたのは、まさに専門書や論文の内容を、ネットワーク的にまとめていくことだった。だが、当時の学習方法は、やはりまだ受動的なものだったように思う。というのも、テキストに記載されているセンテンスをそのまま抜き出すようなことを行っていたからだ。

思い返すと、単にテキストのセンテンスを抜き出すことは、それをいかに知識のネットワークとして整理しようとしても、記憶の定着につながらず、さらには、学習項目に対する深い理解には繋がらないことがわかる。徹頭徹尾、自分の言葉でテキストの意味を再構成していくことが重要になる。そして、それを線形的に整理していくのではなく、項目間の関係性を絶えず意識し、それを実際に視覚化するように、非線形的に知識項目を配列し直す必要がある。

こうした学習方法の効果を実感しながら思うのは、脳の特徴および知識体系の性質を理解しながら学習を進めていくことの大切さである。両者についてはこれまでに何度も言及しているため、ここではあえて後者のみについて簡単に言及すると、知識体系というのは、本質的にダイナミックシステムかつダイナミックネットワークである。知識という一つの要素そのものが、ダイナミックシステムであり、ダイナミックネットワークのノードであり、知識体系というのはそれらの総体に他ならない。いかに知識体系を構築していくかについては、システムの発達過程とネットワークの発達過程を十分に理解

する必要がある。システム科学とネットワーク科学の探究を少しずつ進めることによって、そのあたりに関する理解が徐々に深まり、それは自らの知識体系を構築していく実践の中に結実しつつある。

ロサンゼルスでの記憶を思い出しながら、知識体系をシステム的かつネットワーク的に構築していくための実践についてふと考えていた。もう少し付け加えると、今の私は、知識体系を構築していく領域を適切に見定め、それに向けて能動的な学習を進めていく必要があるだろう。つまり、全ての専門書や論文に対して、ネットワーク的に知識項目を再構成していく実践を行うことができれば理想的だが、現実的には優先順位を設けなければならないだろう。とりわけ、優先順位として高いのは、自分の実務や研究に関するものである。

その時に、さらに優先順位を分析してみると、自分の関心を捉えて離さないものについて、ネットワーク的な知識の再編成実践に従事したいと思う。そのようなことを考えると、領域としては、教育科学、発達科学、システム科学、ネットワーク科学、教育哲学、作曲理論が挙げられる。当面は、それらに関する専門書や論文を読む際には、絶えず能動的な学習実践を心がけたいと思う。

早朝から雑多な考えを書き連ねてきたが、ここにこのように文章を書き留めておくことも、自分にとっては不可欠な実践であり、日々の習慣的行為である。これから午前中の仕事に取り掛かりたい。

2017/11/1(水)07:56

No.369: Music and Biosphere

Music resides in the noosphere, but it should exert a transformational influence on the biosphere. One sphere should not be reduced to the other. At the same time, both spheres should not be separated. They are continuous and interdependent. Therefore, music has to connect with the biosphere and transform the quality of the sphere. 08:02, Saturday, 11/11/2017

1725.「学習理論と教授法」のコースの最終試験を終えて

今日は午後に、「学習理論と教授法」のコースの最終試験を受けた。曇り空の中、試験会場に向けて自宅を出発したのは、午後の一時を過ぎた頃だった。

数週間前に早朝に外出する際に、すでにマフラーを巻くような日が何度かあった。もう日中に外出する時にもマフラーが必要かもしれないと思う。今日、体感的に理解できたが、10度を下回ったらマフラーを巻く必要がある。明後日以降からは、日中の気温がそのような温度になるそうだ。

試験会場までゆつくりと30分弱歩くと、無事に試験会場についた。その近辺は緑が豊かであり、会場に向かうまでの道の途中で、自然を眺めることができ、試験会場に到着する頃には随分と気分が落ち着いていた。

今回の試験会場に来たのは初めてのことであり、そこは映画館やレストランなどのある大きなレクリエーション施設だった。外装も内装も非常に清潔感があり、良い印象を私に与えた。特に、会場内の壁に掛けられているアート作品は、洒落た雰囲気を醸し出していた。

会場に到着して真っ先に、試験が行われる部屋を確認した。試験が行われるのは、だだっ広い部屋であり、その大きさに驚いた。友人のリチャードから話を聞くまで気づかなかったが、試験が行われる部屋は、「部屋」というよりも、それは体育館であり、プロのバスケットボールチームが使う試合会場で試験を受けることになっていた。とてつもない広さの体育館に、無数の机と椅子が並べられている様は圧巻であった。

少しばかり課題論文と講義資料に目を通した後に、試験会場に行き、試験を受けた。三時間に及ぶ長丁場であったが、全ての問いに対して納得のいく回答をすることができたように思う。試験が終わりに差し掛かった頃、強い雨が体育館の天井に落ちてくる音が聞こえ始めた

試験を終えた時には雨も弱くなっていたが、寒さが増していた。すっかりと暗くなった景色を眺めながら私は自宅に戻った。

来週の木曜日には、「評価研究の理論と手法」に関する最終試験が控えている。この試験が今学期の一番の難所である。今日の試験では、論文と講義資料を試験会場に持ち込むことができたが、来週の試験はそれができず、今度は手書きではなく、コンピューター試験となる。三時間、ひたすら自由記述式の問題に対してタイピングをしていく環境に置かれることになる。来週の試験に向けて、これからの一週間の計画は全て練っており、この計画通りに学習を進めれば、今日と同じように試験を突破できると思う。

来週の試験が終われば、来学期からは筆記試験の課されないコースを履修することになっている。それらのコースでは、期末に論文を執筆することが課題となっており、米国の大学院に所属していた際には、こちらの形式が主であったため、私はどちらかというと論文を執筆する課題に慣れている。いずれにせよ、ひとまずは来週の試験に向けて入念な準備を行いたい。2017/11/1(水)21:03

No.370: Rhythm and Melody; Music and Humans

I was thinking about the relationship between rhythm and melody last night. The latter encompasses the former, whereas the former does not.

The book about music composition that I am currently reading mentions that a rhythm is the identity of a melody. I want to explore the requirements and conditions of beautiful melodies, focusing on the nature of rhythm. In addition, if a rhythm is the identity of a melody, I can generate various types of identity by alternating rhythms.

A piece of music is similar to a human being in that it can have multiple types of identity, although they integrate into certain unity. 09:01, Saturday, 11/11/2017

1726. 寒さの厳しい朝に

昨日から、屋外のみならず、室内においても気温が随分と低くなっていることに気づいた。基本的に、オランダの家には暖房設備が完備されており、部屋の中で寒さを感じることはない。

昨日、部屋の暖房を確認すると、何やら機械が不具合を起こしているようで、暖房が機能していなかった。昨年も一度か二度、このような事態を経験していたように思う。さらには、暖房のみならず、お湯も出てこない状況になっており、昨日は湯船に浸かることを断念した。真冬の時にこの事態に遭遇すると極めて厄介だが、冬を迎える前の出来事であったことは幸運だ。

取り急ぎ、建物の管理会社に連絡をし、今日の午前中にはこの問題は解決するだろう。しかし、それにしても今朝は寒い。書斎の気温を少しでも上げるために、窓のカーテンを全て閉じているのだが、暖房がなければ部屋の気温もこれほどまでに低くなるのだと痛感している。この寒さに耐えるた

め、就寝時に使っている湯たんぽを起床直後から再び使うことにした。昨年と同様に、この湯たんぽは今年も重宝することになるだろう。

普段は書斎の窓のカーテンが開いているため、外の景色が見えるのだが、今日はそれを見ることができない。カーテンの向こう側には、まだ闇の世界が広がっていることだけを察知することができる。

時刻はまだ、早朝の六時を少し回ったところである。小鳥の鳴き声がかすかに聞こえてくる。その他に聞こえる音はないだろうか。

一台の乗用車が、目の前の通りを走り去った音が聞こえる。書斎の中ではショパンのピアノ協奏曲が流れているのが聞こえる。外側の音らしき音は、それぐらいだろうか。

それでは、自分の内側の音はどうだろうか。全身をスキャンするように自分の意識を動かしてみる。

身体がとても生き活きとしており、今日一日の活動が充実したものになることを予感させてくれる。自らの思考の中に鳴っている音は、とても穏やかであり、身体の活力を優しく包んでいる。

今日は午前中に、現在協働中の日本企業とのプロジェクトに関するミーティングがある。来年の春に世に送り出すサービスの開発に向けて、今年度中はこのプロジェクトが一つ重要になる。そしてもう一つ、数日前に、正式にまた大きなプロジェクトに参画することが決まった。こちらは年内から本格的に動き出すことになるだろう。両者のプロジェクトも、途中途中の最終成果物はあれど、少なくとも数年間にわたってなされるものである。協働者の方たちとの仕事は極めて進めやすく、こちらとしても数年間のお付き合いをさせていただけることは有り難い。二つの大きなプロジェクトに関与する一方で、二、三の小さなプロジェクトにも携わっている。こちらに関しても協働者の方たちに恵まれ、仕事が非常に進めやすい。

数日前に改めて考えていたが、本業の学術研究を行うための時間を考えると、自分が同時に携われるのはせいぜい、大きなプロジェクトが二つか三つ、小さなプロジェクトも二つか三つぐらいだと思われる。これからは自分がなすべき仕事は何なのかを考え、携わる協働プロジェクトの見極めをしていく必要があるだろう。2017/11/2(木)06:35

No.371: Inherent Nature of Learning

The inherent nature of learning is that learning invokes Eros or ecstatic explosion. I suppose that one of the most significant roles of teachers is to nourish such a rapturous emotion for learning.

Today, I have been with such ecstatic joy for learning. In that sense, I have engaged in authentic learning to cultivate not only my knowledge but also my being. I guess that the ecstatic and explosive impulse for learning is inspirited within my soul.

I have to appreciate all of my previous teachers who have contributed to nurturing my love for learning. 20:09, Saturday, 11/11/2017

1727. 音楽の言語世界

昨日は、長丁場の試験を受けたこともあり、帰宅してからすぐに探究活動を再開するのは賢明でないように思われた。活字を読み、そこから自分の言葉を紡ぎ出していく余力が残されておらず、夕方からは手を動かすことに重点がある仕事を行うことにした。その後、就寝前には、自己に休息を与え、休息の中で探究と創造を行うべく、作曲実践に時間を充てていた。

現在取り掛かっている曲を作る過程の中で、また次々と課題が見つかる状況に置かれている。それらの課題を全体として取り組もうとすると解決が非常に難しいため、部分に分解してそれぞれの課題に向き合っている。そうしなければ、課題の全体に押しつぶされてしまいそうになるため、この方法は今の自分にとって大切なアプローチのようだ。分解された課題に対しては、作曲理論や音楽理論の専門書、そして過去の作曲家が残した楽譜を参考になっている。

焦ることなく、ゆっくりとひとつひとつの課題を乗り越えていくことは、学習や発達における肝である。昨夜も、作曲に関して自分が抱えている課題に真っ向から取り組もうとすると、それは全く手に負えるものではなかった。

今はまだ、一つ一つの小さな課題を着実に乗り越え、作曲理論の理解と作曲技術の確かな土台を形成していく時期だ。一方で、システム科学の古典的な考え方の中に、全体は部分の総和に還元することができない、という発想がある。この発想を採用すると、実は私が今抱えている本質的な課

題は、部分に分解しては決して解決されえないものなのだと知る。一方で、部分が解決されて行った後、再びそれらを全体に戻した後に、元の全体はどのような姿になるのだろうかという関心がある。

今この瞬間に抱えている全体としての問題は解決されなくても、それは部分としての問題が解決されていくのに応じて、新たな全体が生まれることによって、課題そのものが生まれ変わるような予感がしている。全体が生み出す本質的な課題とは、もしかすると解決されるようなものではなく、新たな全体が生まれた際に、質的に別のものに変容を遂げていく類のものなのではないかとふと思う。

昨夜の作曲実践の最中に抱えていた課題を思い出すと、曲の流れと膨らみをいかに持たせるかということが課題だった。今はまだ、文章の執筆で言うところの、語彙に該当するモチーフを生み出すこともおぼつかない。ましてや、複数のモチーフを関連づけてフレーズを生み出すことはさらに難しい。さらには、複数のフレーズを組み合わせ、音楽的に有意味な一つのパラグラフを作ることが極めて難題だ。

作曲を始めた頃には、音楽言語と自然言語の関係性を掴むことは全くできなかったが、今はその関係性がようやく見え始めている。音符は文字に該当し、モチーフは言葉に該当し、フレーズはセンテンスに該当する。そのように考えてみると、これまでの私は、作曲に必要な文法を学ぶことにのみ焦点を当てており、語彙を獲得するという意識が希薄であったように思う。そのため、これからは語彙を豊かにしていくことを意識していく必要があるだろう。

自分の内側にあるものを曲として表現してくためには、それを形にしてくための音楽的な言葉が必要になる。そうした言葉を獲得していくことにこれからは意識を当てていく。その際に、主要な方法は、やはり過去の作曲家が残した楽譜を参考にすることだろう。できれば、実際に曲を聴きながら、自分の関心を引くモチーフに着目し、それを楽譜で確認するというを行う。

おそらく、そうした確認作業をしただけでは、そのモチーフを自分の言葉として使うことはできないだろう。楽譜での確認作業までのステップは、言葉の意味を辞書で調べただけに過ぎない。そこから重要になるのは、実際の曲という文脈の中でその言葉を使っていくことだ。つまり、楽譜によって確認したモチーフを、自分の曲の中で活用してみるという実践が不可欠となる。

自分の関心を引く優れたモチーフを、自分の中に徐々に蓄積していくという実践を行っていく。モチーフ一つ一つには固有の意味があり、意味は文脈の中で生起するものであるから、絶えず一つのフレーズやフレーズグループの中でその意味を掴んでいく。そうすれば、モチーフ間の連関も見えてくるだろう。自分の内側で表現を待つものを、自由に曲として表現するまでには、まだまだ長い時間がかかるだろうが、一つ一つの歩みを着実に進めていきたい。今日の作曲実践もその大切な一歩となる。2017/11/2(木)07:09

No.372: A Fulfilling Day

I will start today's work with making a draft of an application document for a conference in London in 2018. I was supposed to finish it the day before yesterday, but I could not do it because of my other work.

I will focus on it in the morning, and I hope to complete it before lunch. After lunch, I will read some articles and engage in music composition. Today will be also a fulfilling day. 08:14, Sunday, 11/12/2017

1728. 寒い夜の夢

早朝の七時を迎えたため、カーテンを開けることにした。カーテンを開けると、うっすらと明るくなり始めたフローニンゲンの空がそこに広がっていた。

天気予報によると、今日は昼あたりに小雨が降り、それ以外は曇りとなるようだ。最低気温を確認すると、四度を表示しており、暖房がきかない現在の室内の寒さの理由がわかる。

昨夜は、いくつかのまとまりを持つ印象的な夢を見た。起床から一時間ほど経っているため、それらのうちの少数は忘れてしまったが、憶えている範囲の内容を書き留めておきたい。夢の中で私は、日本のある大学が推進する一つのプロジェクトに参画していた。それは大学改革のようなものであり、同時に対外的なマーケティングの意味合いも含まれるものだった。

私は大学時代の先輩たちと共に、このプロジェクトに取り組んでいた。関係者の話によると、学内では似たようなプロジェクトがいくつか走っており、私たちが取り組んでいるものは、そのうちの一つの

ようだった。プロジェクトが順調に進み、最終成果物が、その大学が発行するパンフレットの形となった。

仕事を進めていた部屋の机の上に、出来上がったそのパンフレットが置かれていた。そのパンフレットを手に取り、中身を眺めていると、私の背後で一人の先輩が一言つぶやいた。

先輩:「自分たちの仕事に対して大きな予算を充ててくれ、このような形で仕事の成果が形になるというのはありがたい限りだ」

私:「本当にそうですね」

今回のプロジェクトメンバーの顔ぶれを眺めてみると、全員が日本の外で生活をしたことのある者たちだった。同じ大学を卒業したということのみならず、国外で生活をしたことがあるという事実が、私たちの間の中に妙な絆を生んでいるようだった。そして、その絆のようなものが、お互いの共通理解を促進し、協働作業をより進めやすくしている要因のように思えた。

大学内の仕事部屋から外に出て、その先輩と一緒にタクシーで自宅に戻ることにした。車内の中では、このプロジェクトに関する話で持ちきりだった。

先輩と会話をしていると、このプロジェクトに参画している一人の後輩から、写真付きのテキストメッセージが届いた。文面は、「朝の10時の世界を久しぶりに見ました」というものだった。彼は夜中まで働き、昼夜が逆転している生活を送っている。

彼が添付した写真を開いてみると、一枚のクラシック音楽のCDの表紙が写し出された。手取りした写真のせいだろうか、表紙に飾られている演奏者の顔がぼやけてしまっている。どこかで見たことのある演奏者だということは確かだったが、その人物の名前を思い出すことができなかった。

その人物の名前を思い出そうとしていると、夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、ある劇場の客席に私は座っていた。この劇場の外見は、歴史を感じさせるヨーロッパの雰囲気醸し出している。また、その規模は比較的大きなものだと思う。劇場の中は薄暗く、

客席にしばらく座っていると、ステージが灯りで照らされた。すると、一人の有名な若い女性ピアニストがステージに登場した。彼女はステージの真ん中までくると、客席に向かって深々とお辞儀をした。

すると、そのピアニストは、ピアノ演奏を行うのではなく、英文リーディングの方法について講義を始めた。客席の多くは日本人ではないにもかかわらず、そのピアニストは日本語で英文読解の手法を解説し始めた。彼女の説明に対して、彼女の支援者は熱心に耳を傾けていた。彼女の説明の中で、一つ興味深く、それでいて理解できなかったのが、テキストの四隅だけを眺めていくという読解方法だった。

女性ピアニスト:「テキストの四隅だけに目を通していけば、自ずとその文章のキーワードが現れてきます。最初の数ページにおけるキーワードは何でしょうか？」

ある聴衆:「Fuji!」

女性ピアニスト:「そうですね、正解です」

一人の聴衆が、テキストの最初の数ページにおけるキーワードを「Fuji」だと叫んだとき、同様の手法で文章を読んだ私には、そのようなキーワードは見えてこなかった。聴衆たちは、彼女の説明により釘付けとなっていたが、私の関心は徐々に薄れていった。そこで夢から覚めた。

八時前となり、辺りはようやく明るくなってきた。だが、一向に部屋の中の寒さが厳しい。引き続き湯たんぽを使い、暖かいコーヒーでも飲みながら、午前中の仕事に取り掛かることにする。2017/11/2 (木) 07:49

No.373: Fascination with Writing

As I planned in the morning, I finished making the draft of my paper for a conference. Since the amount was only four pages including references, it was a little bit challenging for me to make such a succinct paper. Yet, I could incorporate a key message and a couple of major findings in the short paper. I sent it to my supervisor.

While I was writing the draft, I realized that I was deeply fond of writing. Whether writing styles are academic or not does not matter. I am fascinated by writing itself.

I renewed my determination to keep writing academic articles and personal journals everyday.

15:03, Sunday, 11/12/2017

1729. 儚さと美しさ

目には見えないほどの小さな雨滴が天空の雨雲から降り注ぐ。近くのと遠くのと空は、どちらも共に雨雲で覆われている。ただ、遠くのと空の奥に見えるさらに遠くのと空は、爽快な青空が広がっている。局所的に降り注ぐ雨を眺めながら、始まりと終わりの関係とその連続的な流れについて考えていた。この話題は、これまで何度も自分の中に湧き上がっていたものだと思う。

諸々の始まりの中にすでに内包されている終わりを見ることができるだろうか。

先ほど、儚さが生み出すある種の感動を感じていた。一つの新しい関係が生まれた瞬間、そこにはすでに関係の終わりが暗に提示されている。自分の子供が生まれた瞬間に、誕生の喜びに歓喜すると同時に、誕生という事実が即座に暗示させる終わりに対して儚さを感じ、それに対しても感動の感情が湧き上がるのと同じだ。

この儚さそのものと、この儚さが生む感動について、どのように伝えることができるのだろうか。先ほど、そのことばかりを考えていた。

以前の私を振り返ると、始まりの影に潜む終わりへの認識ゆえに、何かが始まると、いつも極めて深い哀しみの感情に包まれている自分がいた。何かが始まった瞬間に、それは即座に終わりを暗示しているというのは、非常に皮肉なことだと思っていた。仕事、人間関係、生活において、何か新しいことが始まると、私の陰にはいつもこの哀しい影が付きまとっていた。だが、今は少しばかり、始まりと終わりの関係性を別の視点で眺め始めているような気がする。

始まりと終わりが二元論的なものではなく、それらは連続的なものであり、始まりも終わりもないということについては、以前に何度も書き留めていたように思う。しかし、それらはあくまでも概念的な整理

に過ぎない。体感的には、始まりと終わりという独立したものがやはり存在しており、それらが連続的な関係を結んでいながらも、終わりから新たな始まりへの瞬間は非連続的であり、両者は共に相互依存的な関係を結んでいるように思える。

「ああ、自分が見ていたのは儂さの向こう側なのだ」ということに今気づいた。始まりと終わりの相互関係が生み出す儂さの向こう側にあるものを、私は感覚的に経験してしまった。

儂さの向こう側にある「それ」を経験した時の「この」感情と感覚をどのように記述すればいいのだろうか。

儂さに美を見出すこと。それは、古来我が国の先人たちが行ってきたことだろう。しかし、彼らは儂さの中に美を見出していたのだろうか？ 私はそうでないように思える。

彼らは、今私がこの瞬間に体感している、儂さの向こう側に存在するものを知覚し、それに対して美を見出していたのではないだろうか。そうであれば、私は非常に納得する。

究極的な美の近くにあるであろうこの美的経験の所在は、儂さの中にはない。それは、儂さの向こう側にある。

食卓の窓の外を眺めながら、私は、始まりと終わりを包摂する形でその向こう側に存在しているものを知覚し始めたのだということを知る。であるがゆえに、今日が始まったことに対して絵も言わぬ儂さを感じ、その向こう側に美しさを見出したのだ。

全ての仕事の始まりも全ての人間関係の始まりも、儂さの向こう側にある美を絶えず内に秘めている。

遠くの、さらに遠くの空が、何かを私に語りかけているかのようだ。それは、この現実世界の諸相の一つに光を与える重要な言葉であるように思えた。2017/11/2(木)13:11

No.374: Continuous Work

I almost finish today's work.

As I expected in the morning or even last night, today was a fulfilling day. The process of my work is continuous. The continuous flow defines me at each moment.

How long does it last for me to continue my work? It looks eternal and transient. 20:16, Sunday, 11/12/2017

1730. ライトブルーの空が伝えるもの

何度でも、何度でもこの人生について書き留めておきたいと思う。絶えず絶えず、この人生について書き留めておきたいと思う。

今日は午前中に、現在一つの大きなプロジェクトをご一緒させていただいている日本企業の方たちとオンラインでミーティングを行っていた。正式にサービスの開発プロジェクトが始まり、これから来年の春まで開発に着手していく。

仕事の種類にかかわらず、プロジェクトが開始を告げる時、必ずタイムラインというものが設定される。ミーティングの最後に、何気なくプロジェクトの終わりの日を確認した時、そのプロジェクトはこれから本格的に開始されるというのに、なぜだか静かに込み上げてくるものがあった。

生活のために仕事をすることを止めてから、一つ一つの仕事が自分の人生の中に激しく流入している感覚を持ち始めている。これは不思議な感覚である。同時に、人間の仕事というのは本来こうしたものを指すのではないかと思う。生活のため、金銭を獲得するための仕事は、真の意味での仕事ではないのである。そのようなことを絶えず思う自分がいる。

だが、現実として、生活のために仕事をしなければならないケースもあるだろう。しかし、私はもはやそのような形で仕事をしないと常に自分に言い聞かせている。自分の人生を冒涇したくないからだ。自らの人生を尊重し、自分の人生を真に生きようとする自らの意志を欺くことはもはやできない。

昼食前にミーティングを終え、近所のスーパーに四日分の食料を購入しに行った。明日はランニングに出かける予定だが、それ以外は外には出ない。スーパーからの帰り道、昨日と同様に、昼間でも随分と寒くなっていることを改めて実感した。自宅に近づいた時、私は何気なく空を見上げた。群

れをなす雨雲の隙間に、ぽっかりと雲のない空間ができていた。ライトブルーのその空に、私は引き込まれそうになった。

これから冬がやってくるという考えと同時に、冬の終わりを予感させる切ない感覚が自分の中に起こった。同時に、その切ない感覚は、なぜだか私の表情を緩め、笑顔にさせるのだ。そして、それは私の心を大きく打つ体験として知覚される。雨雲から地上に雨が降り注ぐのと同じぐらいに自然な現象が、自分の両眼に起こる。

生きるということ、仕事をするということは、一体どういうことなのか。それを絶えず問い、そうした問いの中で日々が過ぎ去っていく。過ぎ去っていく方向は、絶えず終わりに向かっており、それはまた一つの大きな儚さを生み出す。

ヨーロッパで過ごす冬は、もしかすると今年の冬を過ぎれば、しばらくはやってこないかもしれない。

また雨が降り始めた。その雨は、これからやってくる冬の始まりを静かに告げているかのようであり、同時にその終わりを暗示していた。さらにその雨は、ヨーロッパの冬との別れを先取るような哀愁を内側に秘めていた。2017/11/2(木)13:39

No.375: Hidden Grace of Wisdom

I was briefly looking at Clementi's music scores. Beautiful music scores are like blueberries because both of them refresh our eyes. Interestingly, taking a brief look at his music scores sparked my music mind to generate various ideas. The latent insights in great music scores are transmittable to other composers. It may be called "hidden grace of wisdom." 20:31, Sunday, 11/12/2017

1731. 美的体験の造形へ向けて

昼食後、仮眠を取っている最中に、目頭が熱くなるのを感じた。降り続ける小雨と同様に、感動のさざ波が自分の内側に残り続けている。この感動を生み出していたのは、昼食時から引き続き起こってる、儚さの向こう側にあるものへの美的感覚だった。この美的感覚を、どうすればうまく表現することができるのだろうか。

それについて、私はまた性懲りも無く考えていた。仮に、曲の形としてこの美的感覚を見事に表現することができたら、どれほど幸せであろうかと思う。それを「美的感覚」や「美的体験」として言葉で表現するのではなく、それを固有の音として表現していくのだ。なぜこれが重要なのだろうか？

それは、儚さの向こう側は一つの究極的な世界だが、儚さを引き起こすものはこの現実世界の中に無数に存在しており、美的感覚や美的体験はその数だけ存在するからである。つまり、究極的な美が生起する世界は一つなのだが、その世界へ向けて投影される現象は無数に存在しており、その存在の数だけ固有の美的体験がある。

過去の偉大な作曲家が、様々な曲を通してそうした無数の美的体験を表現してきたことから想像するに、この考えは一つの部分真理を内包しているように思う。儚さを喚起させる無数の存在を捉え、その存在が儚さの向こう側の世界に投影される瞬間に起こる、その美的体験を曲として表現する。それができたら、どれほど素晴らしいことだろうかと思う。そうした行為は、儚さを生むものへの感謝の意が反映された行為であるように思う。

それを行う一つの重要な手段として、作曲というものがあるのかもしれない。曲の一つ一つのモチーフの中に、フレーズの中に、そうした美的体験を表現することができる日が来ることを心から望む。

作曲という方法を用いることによって、美的体験を自然言語ではなく、音楽言語として表現していくことの意義と尊さを強く感じる。自然言語の形式では造形しえない美的体験の諸相があり、それを音楽言語は形にすることができる。逆もまた然りだろう。

曲という音楽言語を通じて美的体験を表現していくことに合わせて、改めて、自然言語を通じてどこまで美的体験を表現することができるのか、という問題を再度考えていた。「美的体験」という一つの言葉だけを用いても、その体験の奥にある固有の美的感覚は一切伝わらない。だからこそ、その言葉を取り囲む周りの言葉や、部分部分の言葉が集まって生み出される一つの文脈というものが大切になる。

自然言語と音楽言語は、異なる領域に属しているがゆえに、一つの同一の美的体験を異なった形で表現することができる。大事なことは、どちらの言語体系を用いたとしても、儚さの向こう側の美的世界の感覚を表現することが可能だということだ。自然言語を用いては、そうした感覚を表現するこ

とができないと思われがちであるが、それは早計である。それを可能にしてきた偉大な詩人や小説家の存在を、私たちは忘れてはならない。

一つの儚さをもたらす体験があり、それが儚さの向こう側の世界を静かに映し出している時、その投影物と接した時に喚起される感覚を言葉の形にすることは可能なのだ。それは不可能なのではない、可能なのだ。

自分に向けてもう一度繰り返しておく必要があるだろう。それは可能なのだ。

美的体験を言葉の形で造形しようとする試みに着手すると、その他の様々な言葉が付随的に生まれ、それが一つの固有の文脈を作り出し、その独自の文脈が固有の美的体験をありありと表現する。そこで表現されたものが、生々しい美的体験の原型と瓜二つの感覚をそっくりそのまま伝えることが可能なのだということへの気づきは、とても大きなものだった。

先ほど目頭が熱くなった一つの要因は、この啓示的な気づきの存在にあったのだ。2017/11/2(木)
14:44

No.376: Maurice Ravel's Music

Like I did yesterday, I continue to listen to Ravel's music today. His music sounds and looks rainbow-like. His multicolored music invites me to the depth of the kaleidoscopic reality.

Yesterday, I listened to his music for more than 14 hours. Today will be the same. I will be immersed in Ravel's perceptual reality. 09:39, Monday, 11/13/2017

1732. 演奏記号と化粧

今朝の目覚めは七時を過ぎており、今日はいつもより遅い時間に一日の仕事を開始させた。もうすっかりと寒くなり、書斎の窓から見える景色は冬の様相を呈し始めている。紅葉の終わりかけた木々と裸の木々の対照的な姿を眺めることができる。今年の春や夏に、あれだけ青々と生い茂っていた木々の葉がこのような姿になっているのを眺めると、少しばかり感慨深いものがある。

生命力の溢れる青々とした木々と裸の木々、それらは連続的なサイクルを通して、永遠の方向に伸びているような気がしてならない。今日の前に見ている木々は、やがて青々とした葉を茂らす。そして再び、それらは散り、また次の季節の中で青々とした葉を実らせる。これは驚愕に値することだと思う。目の前の木々の内側で起こっている現象とそれを促進する目には見えない力の存在に、ただただ驚かされるばかりである。

昨夜も一日の最後に作曲実践を行っていた。その前に数十分ほど、専門書を用いて作曲理論について学んでいたが、一日の最後の時間に活字情報と向き合うことは時に厳しいことがある。大抵、一日の最後の時間は、もう活字情報が一切入ってこない状況になっている。昨日の日中も、それほどまでに活字を読み書きすることに時間を充てていた。

早々と作曲理論に関する専門書を机の脇に置き、作曲ソフトを立ち上げ、実際に手を動かしながら曲を作る実践に移行した。すると、その日一日がいくら活字情報に満たされたものであったとしても、音符だけが並ぶ音楽言語の世界の中に私は自然と入っていくことができる。

作曲ソフトを立ち上げて、音符だけが並ぶ世界を眺めた時、それは別世界への扉のように思える。自然言語の世界と音楽言語の世界を行き来するような生活を、今の私は毎日送っているようだ。

現在は、前者の世界の方が巨大だが、これから後者の世界がより広大かつ深いものになっていった時、私の認識世界はどのように変容するのだろうか。そのようなことにも関心がある。

昨夜の作曲実践では、またあれこれと新しい概念や技術を試していた。その過程の中で、昨日は演奏記号の中にいくつか興味深いものを見つけた。それらを実際に楽譜上に置いてみて、音を確認しながらその記号の意味を自分なりに掴んでいった。中でも嬉しい発見は、先日ショパンの楽譜を眺めていた際に、よくわからない演奏記号が楽譜一面に散りばめられており、それがペダル記号だということがわかったことである。

実際にペダル記号を用いてみると、音が伸びていくような感覚があり、実に面白かった。そうした実験を繰り返しながら、演奏記号を曲の中のどこにどれほど用いるか、という塩梅に関する感覚を磨いていかなければならないと思った。今の私は正直なところ、新しい演奏記号の意味を理解すると、

それを多用したくなる衝動に駆られる。そうした衝動を抑えながら、必要な箇所に必要な演奏記号を配置していくための知識と経験が、今後は必要になってくるだろう。

以前、バッハの曲を聴きながら、トリルという興味深い演奏記号の存在を知った。だが、それを自分の曲の中に取り入れようとしてもどうもうまくいかない。昨日もある種強引にトリルを使ってみようと思ったが、あまりにも不自然だったので、その案を不採用にすることにした。こうした試行錯誤は、実に深い充実感をもたらしてくれ、音楽言語の世界の中に没入することの契機となる。

昨夜の作曲実践の最後に考えていたのは、一切の演奏記号のない素の美の存在についてである。演奏記号をあれこれと適用しながら思っていたのは、それは化粧に該当するかもしれないということである。化粧をせずとも素の美を持つ人がおり、その美を実際に顕現させている人がいるように、演奏記号が一切ない曲でも美を顕現させることが十分にできるだろう。昨日私が作っていた曲は、残念ながら素の美がそれほどなく、どうしてもたくさんの化粧が必要だった。2017/11/3(金)08:38

No.377: That's it. This is it.

That's it. This is it. Love for creation. Joy for creation. That's it, and this is it. 09:53, Monday, 11/13/2017

1733. 二つの印象的な夢

今日は午前中に、「評価研究の理論と手法」のコースの最終試験に向けて、テキストを能動的に読み込んでいた。

多種多様な研究デザインの一つ一つの特徴を抑え、それぞれのデザインに固有の限界と、それらを克服していくための方法に関する理解を一つ一つ深めていくことは、幾分労力の要することである。また、それらの研究デザインのうち、実際に自分の研究で使うものがどれほどあるのかは疑問だが、自分が活用しないであろう研究デザインが他者の論文の中に現れることは頻繁にあるだろうから、手間暇をかけながらも、一つ一つの研究デザインについて理解を深めていくことは重要だと思う。

以前の日記で取り上げた形で、知識のネットワークを可視的に構築していく読み方を行っているが、やはりこれは非常に効果がある。論文や専門書の情報をマインドマップ専用のソフト上に、ネットワーク的に配置する際に、一つ一つの要素の理解度を自分で検証することを絶えず行っている。

一つ一つの情報を自分の言葉で説明する際に、理解が曖昧なものはすぐに明らかになる。このように、自分の言葉で情報を外側に出そうとし、それを可視化しようとする、理解が浅いものは即座に明らかになる。そうして浮き彫りになった理解の浅い箇所を、もう一度論文や専門書に立ち返って理解を深めることを何度も行っていた。実際には、一回テキストに立ち返っても、すぐに自分の言葉で説明できない箇所がいくつもあり、それらについては何度もテキストの該当箇所を読み、そこからようやくネットワーク的に情報を配置することができるようになる。

午後からも引き続き、この実践に従事していこうと思う。今日は昨日に引き続き、気温が極めて低い。部屋の中にいても寒さを実感する。何よりも、昨日からの暖房と温水の問題がまだ解決しておらず、家の中は暖房が効かず、温水も出ない状態のままである。こうした状態が、寒さに追い打ちをかけている。

すでに昼食の時間となったが、昨夜の夢の断片がまだ記憶の中にある。昨夜の夢には、前職時代にお世話になった方たちが何名か現れていた。二つほど印象に残っている点がある。一つは、同僚が、ブルーレイ再生ディスクを私の机の引き出しから持ち出し、昼休みの時間を使って映画を見ていたことである。昼休みの時間が数分過ぎても、その同僚はまだ映画を見続けていた。

すると突然、二人の上司が現れ、勤務時間中に映画を見ていることを激しくとがめ、その同僚を引きずりながら別室に運び去っていった。私は、自分のブルーレイ再生ディスクが没収されることを心配していたようであり、なんとかそれが没収されずに済んだことに安堵感を抱いていた。そこから夢は続き、二つ目として印象に残っているのは、ある女性の上司と共に製薬会社の現状分析を行った後、お互いの顔のパーツを巨大なコンピュータースクリーンから選び出すことを行っていたことだ。

これは完全に遊びの一種であり、お互いが一つの仕切りを挟んで、各人の目の前にあるスクリーン上に相手の顔をコンピューターグラフィックで再現していくものである。私は、その上司の顔を再現

するよりも先に、その方が自分の顔をどのように再現しているのかに関心があったので、その場を離れ、上司が向き合っているコンピュータスクリーンに近づいていった。すると、顔の輪郭に関しては非常に上手く再現されており、非常に驚いた。

上司は、私の口を再現することに苦戦しているようであり、上司がパーツの候補を選ぶたびに、私は横から茶々を入れた。そのゲームに興じていると、社内の中で仕事に関して最も厳しい方が私たちの目の前を取り過ぎていった。その方は私たちの方を一瞥した後、無言で自分のデスクに向かっていた。上司と私はそれを見て、お互いの顔の再現が未完成のまま、そのゲームを終えることにした。

この夢の後、私はまた別の夢を見ていた。広大な平野の中に、天に続くような巨大な建物がひっそりと建てられており、その中に入って上へ上へと向かっていく夢だった。

その建物は外見上、階段のような作りになっているのだが、中に入ってみると、そこには階段のようなものは一切なく、建物の中が複雑に入り組んでいた。そうした複雑な構造と共に、建物の中は微妙な傾斜があり、その傾斜を上がっていくと、どんどんと天に近づいていくようだった。

建物の外で、一人の老賢人がこの建物の特徴を説明してくれた。しかしながら、建物の中には一切人がおらず、複雑な構造と天がかすかに見える建物の天井部分が遥か彼方に見えただけだった。

2017/11/3(金)12:31

No.378: Love for Learning

As John Dewey argues, the essence of education is not simply fostering a habit of learning but nurturing a love for learning. I strongly believe that it is foremost important not only for child education but also for adult education. Even adults can acquire such a love for learning.

It must be our intrinsic nature as human beings that are destined to continuously learn throughout life. 10:31, Monday, 11/13/2017

早朝から外気の気温のみならず、室内の気温も低く、もう完全に冬に入ったことを知る。暖房と温水の不具合により、午前中は本当に寒かった。なんとか寒さを凌ぎながら午前中の探究を進めていた。

午後の三時を過ぎてから、ようやく修理屋が到着し、二つの問題を解決してくれた。二つの問題が無事に解決した後、つくづく他者の仕事が自分の人生にもたらす恩恵を知る。結局、私はそれら二つの問題を解決するための知識と技術を持ち合わせておらず、問題の所在が分かっているにもかかわらず解決することはできなかった。

それらの問題を解決するための専門知識と技術を持った人のおかげで、今回の問題が解決され、再び快適な生活に戻ったと言える。これは今回の一件のみならず、自分の人生の至る所に見られる事柄だと思う。私たちの人生は、自分が持ち合わせていない知識と技術を兼ね備えた他者の仕事の恩恵によって支えられている。今回の一件は、それを象徴する出来事であった。

ここから私はまた、自分の仕事に対する一筋の希望を見出した。現在、ヨーロッパの土地で日々積み重ねている知識と技術は、いつかきつと何らかの形で、この世界の誰かに直接的、もしくは間接的な形で貢献することができるという希望を見出している。

日々の探究で磨かれていく知識と技術の体系は、この世界への関与に活用されることを待ち望んでいる。既存の知識と技術の体系に、新たな知識と技術が積み重ねられる瞬間に見られる火花が、内側を明るく、そして熱く照らす。この灯火があれば、この冬も乗り越えられるような気がする。

今日の活動を振り返ってみると、「実証的教育学」のコースの最終論文を無事に昼食後に提出した。このコースで得られたことは多く、とりわけ、実証的教育学の何たるかを知り、教育的介入プログラムの組織的導入に関する戦略立案とモニタリング手法などについて、かなり実務的な理解を深めることができた。この論文の提出に加え、一日の大半は、「評価研究の理論と手法」のコースの最終試験に向けた準備をしていた。

先ほど改めて思ったが、このコースで取り上げられた二冊の専門書を受動的に読み進めることを受講者が行っていた場合、彼らはおそらく最終試験を突破することができないだろう、ということだ。それほどまでに、この二冊は分量も多く、なおかつ内容も概念的であり、それらを咀嚼するためには時間と工夫が必要になる。仮に今学期、「学習理論と教授法」というコースを履修しなければ、私も上記のコースの最終試験を無事に突破できたかどうかはわからない。

「学習理論と教授法」というコースを受講することによって、私はまた新しい自分独自の学習方法を見出し、それを自分の日々の探究生活の中に組み入れつつある。この新しい学習方法がなければ、私は非効率的かつ、学習効果の極めて薄い学習を延々と進めていたであろう。

これから夕食までの時間、そして夕食後から一時間ほど、また「評価研究の理論と手法」のコースの最終試験に向けて学習を進めていこうと思う。2017/11/3(金) 17:16

No.379: Soothing and Healing Chord Progression

After I finished morning work before lunch, I was listening to some beautiful chord progressions again and again. One of the inspirational chord progressions was Pachelbel's Canon in D. It soothed my soul and healed my psyche. I determined to experiment on composing such a soothing and healing chord progression within a couple of days. 12:08, Monday, 11/13/2017

1735. ある仮想通貨への応援

昨夜は作曲実践をすることなく、仮想通貨の今後についてあれこれと考えていた。実際に、様々な情報を調べながら、現在の仮想通貨の動向を把握し、今後どのように仮想通貨が進展していくのかを考えることに数時間ほど時間を使っていた。

この七年間ほど発達科学の領域に従事してきたが、私の元々の関心領域は経済や金融にあった。大学時代を振り返ってみると、当時履修していた講義のほとんどは経済や金融に関するものである。大学のゼミナールは金融系のものではなく、会計系のものだったが、当時はとりわけ金融工学の領域に関心を持っていたように思う。今となっては経済や金融に関する専門書など一切読むことはないが、それでも両者の分野に関しては少なからず関心を持ち続けている。

というのも、両者の領域が私たちの生活と切っても切れないという点と、私たちの生活に大きな影響を与えるという点を持っているからだ。とりわけ、数年前から仮想通貨(ブロックチェーン)の技術に着目しており、それらの技術が社会により浸透していった時、私たちの生活はどのように変化していくのだろうか、ということに関心を持ち続けている。さらには、現在の自分の専門領域である人間発達の観点から、そうした仮想通貨の浸透による社会の変容が、私たちの意識にどのような影響を及ぼしうるのかについて考えることがある。

仮想通貨に対して概念的に考えるだけではなく、実際にそれらを保有してみて、体験を通じてそれらの今後を考えるということを行っている。投機目的というよりも、その仮想通貨への応援を込めて、数年前にある仮想通貨を幾分購入した。その通貨に関する夢を少し前に見た時に、その通貨の価格を確認してみると、随分と価格が上がっていた。数日前にもう一度確認すると、どうやら先週の段階では突発的に、購入時の70倍の価格が付けられていた。

1円と1億円が等しい価値を持つという認識を持つようになってから随分と時間が経った。つまり、貨幣の虚構性が認識世界の中で真に明るみになって以降、1円と1億円は、ある観点からすれば価値に差があり、それぞれ固有の価値を内包していながらも、両者は共に無価値であることに気づき始めてから幾分の時間が経った。

現在保有している仮想通貨は、とてもユニークな特徴を多々持っており、それは通貨というよりも、愛着をもたらす存在として認識している。今後もこの通貨を保有し、その動向を見守りたいと思う。

昨日仮想通貨について色々と調べてみると、その種類の多様さのみならず、一つ一つの通貨には固有性があるって実に面白いと思った。今後社会に導入された時、私たちの生活に利便性をもたらす機能が付加されている通貨もいくつかあり、興味深く調べていた。

将来有望な機能を持つ仮想通貨がいくつもあることを知り、それらはおそらく今後価格を上げていくものだと認識したが、それらを保有したいとは思わなかった。愛着を引き起こすものがそれらの通貨には欠けており、将来有望な機能が付加されているということだけでは、応援したいという気持ちが起こらなかった。だが、仮想通貨の技術に関して意義のある技術を持っている、ある会社を応援したいという気持ちが芽生えてきた。その会社には、現在保有している仮想通貨の取引でお世話

になっており、その会社の持っている技術を改めて調べてみたところ、非常に価値のある特殊な技術だと思った。その会社を応援する意味も込めて、仮想通貨における株のような存在である、その会社の「トークン」を少しばかり保有することにした。仮想通貨の技術、そしてそれが私たちの生活と意識に及ぼす影響について今後も折を見て考えていきたいと思う。2017/11/4(土)08:08

No.380: A Long Way

Biweekly meetings for my research began from today. I had a meeting with my supervisor in a cafe at the university. Today's meeting was quite helpful for cultivating my skills to write a scientific article. It would be common that we have difficulty in finding out the limitations of our own conceptual framework. I realized it again from the meeting.

All of my supervisor's comments and feedback were beneficial in that they revealed my implicit assumptions and logical leaps in my paper. It's a long way for me to write a sophisticated academic paper. However far it is, I will walk on the path. 19:43, Monday, 11/13/2017

1736. マネーアタッチメントとマネーパス

昨日の午後に、暖房と温水が復旧して以降、再び快適な生活が取り戻された。それらが復旧するまでの二日間は、寒さに耐えながら生活をしなければならず、非常に不便な思いをした。そうした不便さの中でも、何とか工夫を凝らしながら寒さを凌ぎ、今はまたこれまでと同じように、集中して自分の仕事に取り組める環境に戻った。

先ほど仮想通貨に関して文章を書き留めていたが、もう少しそれについて補足しておいた方がいいかもしれない。仮想通貨への補足というよりも、現在保有している仮想通貨とある会社のトークンが値上がりし、資産総額が膨れ上がった時の状況についてである。少し前に仮想通貨に関する夢を見た時に、翌朝久しぶりにその通貨の値段を確認して以降は、一切その通貨の値段を確認することはなかった。

昨夜突発的に仮想通貨について考えようとする自分がそこにいたため、昨夜は久しぶりにその価格を調べてみた。以前にも書き留めていたように、数年前にその通貨を購入した際は、日々の値動

きがわかるように、メールで通知を受けるような設定をしていた。しかしそもそも私は、その通貨を長期的に応援するという意味でそれを保有することにしていたため、毎日の値動きなど一切興味がなく、毎日届く通知が大変煩わしいと思うようになった。通知を解除してから二年ほど経った数週間前に、久しぶりにその価格を見たのが、その夢の翌日だった。

昨夜に仮想通貨に対して少しばかり調べ、自分なりの見立てを持っておこうとした都合上、昨夜もまたその通貨の値段を確認した。確か、先日の夢の中では、その通貨の価格が購入時よりも100倍になっており、その夢を見てからしばらくすると、一時は70倍にまで価格が急騰していた。昨夜の段階では、購入時よりも30倍ほどの値段が付けられていた。

パソコンの画面上に表示される資産総額を眺めながら、結局自分は、資産がどれほどあったとしても、今と全く変わらない生活を送るのだということを改めて知った。実際に、あれこれと試算と思考実験をしていた。先日の夢の中で確信していたように、仮にその通貨が購入時よりも1000倍の値段が付けられた時に、自分はどのような生活をしているかを考えていた。いくら考えてみても、結局日々の生活は今と同じようなものだった。つまり、読むこと、書くこと、作ることだけがある生活を送っていることに変わりはないだろうということだ。

仮に日々の食事を贅沢なものにすることを想定した場合、不必要な量の食事を摂ることによって、消化の負荷によって脳の働きが鈍化することをひどく恐れる自分がいた。それによって、夕食後の探究に不都合が生じることを憂う自分がいたのである。結局資産が増えても、毎日の夕食のように、有機栽培のトマト一個とセロリ一本、それに行きつけのチーズ屋で購入したチーズを少々食べることに変わりはないのではないかと思う。

専門書の購入に関しても、必要なものを必要な時に購入するということは、すでに数年前から実現されていることであり、それについても何ら変わることはないだろう。結局、あの夢が示唆していたように、仮に購入時の1000倍の値段が現在の保有通貨に付いたとしても、自分の日々の生活ぶりは変わらないのだと思う。

昨日のように、そして今日のように、自分の仕事を淡々と行っていく日々が人生の終わりまで続いていく。それ以外に望むことはなく、そのようにこれからも生きていく。

昨夜、PC画面に表示された資産総額を見ながら、「マネーパス(moneypath)」という造語が頭の中に浮かび、それは現代社会で相も変わらず蔓延している「マネーアタッチメント」と相反する概念だと思った。2017/11/4(土)08:37

No.381: Learning by Creating and Making Mistakes

I found a very insightful paper to articulate what I have thought about the essence of learning. The paper introduced the term “learning by creating.” It resonates with my idea of the essential purpose of education.

While I compose music, I make a number of mistakes. I realize that I am learning by creating and making mistakes. The gist of learning is creation and mistakes. I will learn by making many mistakes in today's music composition practice. 20:33, Monday, 11/13/2017

1737. 身体感覚と学習

ふと書斎の窓の外に視線をやると、辺りがほのかな闇に包まれ始めていることに気づいた。土曜日の五時を少し過ぎた今この瞬間に、自分は存在している。それを表明することによって、自分の存在を証明しようとする試み。実際には、それは証明とはほど遠く、存在の刹那的な確認に過ぎない。だが、こうした試みをしながら少しずつ前に進んで行くことが大事だと思う。あるいは、そうした試みに着手しなければ、もはや自分は一步も前に進んでいけないような気さえしている。

今日は、早朝に二つほど日記を書いて以降、日本語で文章を書くことがなかった。午前中から夕方この時間帯にかけて、来週の木曜日に迫った「評価研究の理論と手法」のコースの最終試験に向けて準備をしていた。予定以上に学習を進めることができ、二日かけて行う分量を今日一日でこなしていった。今の自分の状態を確認すると、もう少しばかり学習を進めることができそうであるため、これから夕食までの時間にもう少し学習を進めていく。

今日取り組んでいたのは、“Experimental and quasi-experimental designs for generalized causal inference (2002)”の第一章から第三章であった。今の自分に理解可能な事柄と不可能な事柄の境界線というものがあり、学習の進め方とその量いかんによって、その境界線が少しずつ引き直させる

現象を観察することができる。これは体感を伴った鮮明な現象であり、実に興味深い現象である。数日前にも今日取り掛かった章の一つを読んでいたのだが、その時に、どうしても理解の難しい概念があり、今はそれを理解する時ではないと判断し、時間を置くことにした。

同テキストの他の章を読み、もう一度今日その箇所に帰ってくると、その概念を身体感覚を通して理解することができた。余白を設け、その過程で絶えず進み、再びそこに帰ってくることの意義を実感する。「ああ、これは学習のみならず、人間発達の根幹原理の一つである」という言葉が自然と漏れる。自然と漏れた言葉はまさに、自分の身体を通して起こる生理現象とほぼ同様のものであり、それゆえに、実に自然かつ本質を突いたものだと思う。

私はようやく自分の身体に忠実になって学習を進めることができつつあるように思う。身体から発せられる諸々の感覚や警告などを察知し、それらに基づいて適切に学習を進めていくことができている。余白の設け方や細々とした学習方法は、その一例である。脳を含めた、身体へのほどよい負荷を通じて、自分の内側に知識の体系がネットワーク的に構築されていく。それはシステム的かつネットワーク的である。知識の獲得プロセスとその発達プロセスの容姿と性質、そしてそれらが引き起こす諸々の五感覚情報を察知しながら学習を進めることができ始めていることはとても喜ばしい。

この喜びの感情を鎮め、さらに深い喜びの感情へ誘うかのように、雨がしとしとと降り始めた。もう辺りは真っ暗だ。視界に入る街灯が黄色く闇の世界に浮かんでいる。今日という一日はまだもう少し続きがある。2017/11/4(土)17:31

No.382: Creation and Mistakes

I will learn by creating and making mistakes. Both creation and mistakes deepen the quality of my life. My life is filled with an infinite amount of creation and mistakes.

Quantity and quality unite with each other here. In other words, the number of mistakes corresponds with the quality of life. I will continue to walk with a flood of creation and mistakes. The process of my life is a continuous flow of creation and mistakes. 20:39, Monday, 11/13/2017

今日の仕事を全て終え、夕食後からは作曲の学習と実践に時間を当てることができそう。昨夜は仮想通貨についてあれこれと調べていたために、作曲の学習と実践に一切時間を設けることができなかったため、今日は十分に時間を取りたいと思う。

今日の午前中から夕食前にかけて探究を続け、学習内容を自分の内側で寝かせる意味も含め、今日はこれ以上学術的な探究に時間を使わないようにする。

自然言語と音楽言語を絶えず行き来するような生活をしていると、自ずと二つの関係について考えるものである。以前言及したように、一つの文字を一つの音符と見立て、一つの言葉を一つのモチーフと見立て、一つの文節を一つのフレーズと見立てていく。そこからさらに段落や文章全体という構造を考えることができ、それと音楽の言語世界を関連づけていくことができる。

数日前に少し考えていたことをここに書き留めておきたい。一つの曲が持つ本質的なメッセージや主題というのは、実はそれほど多くないのではないかと思う。もしかすると、それは一曲に一つのものである場合がほとんどだと言えるかもしれない。そうした一つのメッセージや主題を伝えるために、様々なモチーフとフレーズが生み出され、そしてそれらが相互連関の中で配置される。そこから考えていたのは、一つの曲が究極的に伝えようとするメッセージや主題はどこにあるのかという、所在の問題である。

それは冒頭なのだろうか、曲の途中なのだろうか、曲の最後なのだろうか。もちろん、その回答は曲によりけりかもしれない。仮に曲の最中にそうしたメッセージや主題が置かれるのであれば、そこに至るプロセスはどのようなものになるのだろうか。そこに至るまでの過程の中に様々な小道を設定し、その小道にメッセージや主題を暗示させるものを配置していくというのはどうだろうか。ある意味、それは文章で言う伏線のようなものだろうか。

普段学術論文を執筆する際には、各段落の冒頭に重要なメッセージを持ってきて、最後にまたそれと同質のメッセージを持ってくることが多い。作曲に関しても、冒頭と終結部が重要になると思うが、その間に山を生み出し、そこに最重要なメッセージを持ってくるという形は一般的なのかもしれない。

これから数多くの楽譜を参照する際に、そうした曲の構成についても関心を払っていかうと思う。その際に、一曲全体の構成のみならず、一つの段落内のフレーズの配置などの構成にも着目していきたい。2017/11/4(土) 19:33

No.383: Navigation

I have a small fun every morning. That is to open a tea pack with a message. Every message in each pack is insightful, but today's one was exceptionally profound for me.

It says: "This place where you are right now, God circled on a map for you."

This is exactly what I often think. I often feel that something beyond me navigates me into the right place in this reality. I plan to go back to the US next year as a visiting fellow, and I imagine that something will lead me to the most suitable place for me. 07:47, Tuesday, 11/14/2017

1739. コード進行に関する疑問の解決

昨夜の作曲実践は実りが多く、また様々な気づきを得ることができた。とりわけ、コード進行に関する理解が一步深まったように感じている。これまでは、コード進行の中でも最も頻繁に使われるものしか知らず、さらにはそれらを塊として学習していたため、その塊からさらにコードを膨らませていく方法というのが分からなかった。しかし、昨夜、先日購入した作曲理論のテキストの第二巻に、自分の疑問を解決してくれる記述があった。その記述のおかげもあり、昨日、ようやく無数のコードを自由に進行させていく方法を掴んだと言える。

昨日も試しにその方法を実践し、その理解を身体知の次元で落とし込んでいくことに従事していた。コード進行に関する疑問については、その他にもいくつかあったが、それらについても本書を通じてほぼ全て解決させることができた。

就寝時間が迫り、作曲実践を終えようとした時、そういえば、以前に立てた仮説についてまだ検証実験を行っていないことに気づいた。それは、メロディーから曲を作っていく方法に関するものである。今の私は、最初にコード進行を決め、そこから曲を作っている。この過程の中で、コードの進行

のさせ方に無数のヴァリエーションがあり、さらにはコードを転回させることによって、その組み合わせ方はさらに多岐にわたる。

今はまだ作曲の初期の段階であり、コードの転回形を作る訓練も兼ねて、この方法で曲を作っていくことは大きな学習の場になっている。一方、就寝前にメロディーが溢れてくる体験を経験してみると、どうしてもそれらを曲の形にしたいという思いが強くなる。

メロディーから曲を作っていく方法については、仮設的なものがいくつもあるが、それをまだ試していないがゆえに、どれが自分なりにしっくり来る方法なのかがわかっていない。興味深いことに、そうした疑問を持ったまま床に着くと、昨夜は夢の中でメロディーから曲を作る方法に関する指導を受けた。夢の中に一人の著名な女性ピアニストが現れ、その方からメロディーから曲を作る際の肝について教えを受けた。だが、目覚めてみると、その肝が何だったのかは覚えていない。しかし幸いにも、その肝が一度自分の内側を通過したという感覚がある。

おそらく、その感覚は自分の深層部分にまで一度降りていき、ここから作曲実践と共にそれを発酵させ、日々の試行錯誤を通じながら徐々にその形を浮き彫りにしていきたいと思う。自分の内側から湧き上がってくるメロディーを、その場で自由自在に曲の形にすることができたらどれほど幸福だろうか。

以前の仮説に立ち返り、短いものでいいので、思いついたメロディーを録音しておき、その録音を聴きながら、作曲ソフト上で忠実にそれを再現することができるかどうかの訓練を行っていきたい。おそらく、これさえできれば、メロディーから曲を作ることに關しては、現状十分なのではないかと思う。

短いメロディーを忠実に再現させた後に、そのメロディーとの関連性を考慮し、さらに新しいメロディーを作っていく。そうしたプロセスで曲ができていくのかもしれない。いずれにせよ、まずは種となる、あるいは、核となるメロディーを忠実に再現する訓練を積み、再現されたものからさらに新しいメロディーへと膨らませていく方法を掴んでいくのが次のステップになるだろう。

今日も仕事が予定よりも早く終わったら、作曲理論の学習と作曲実践に多くの時間を充てたい。

2017/11/5(日)06:16

What is my hope today? I hope that today will be filled with an infinite number of creation and mistakes in my practice. I can call the innumerable amount of creation and mistakes as fullness for my life. Such fullness is replete with delight, enjoyment, gratification, and bliss. 08:12, Tuesday, 11/14/2017

1740. 仮説的作曲実践

昨夜の作曲実践を通じて得られたことをもう少し書き留めておきたいと思う。昨日は、コード進行を無数に展開させていく方法についてようやく知り、それを早速実践していた。その時に、よく用いられるコードの進行とあまり用いられないコードの進行を組み合わせていた。特に明確な意図はなく、とりあえず思いつくままに、頻繁に用いられるコード進行とそうでないものを組み合わせていた。

これから作る曲のコード進行表をノートに書き出し、そこから今度は、どのコードを転回形にするかを決めて行った。本来であれば、転回形にするタイミングなども曲を作りながら行っていくことだと思うのだが、とりあえず私は、最初にそれらを全て決めてしまう方法を採用した。

とにかく最初は、方法をシンプルなものにし、そうしたシンプルな方法に十分習熟してから方法をアレンジしていけば良いと考えている。このような方法を採用しているがゆえに、自分のノートの上には、作曲をしているにもかかわらず、音符が登場することは少なく、アルファベットと数列が並ぶことになる。そのアルファベットと数列を頼りに、作曲ソフト上で音符の形にしていくということを行っている。

以前にも言及していたが、作曲にはパズルの要素が多分に含まれており、コードの進行のさせ方にもそうした側面が強く表れている。ノートに書き出されたアルファベットと数列を頼りに、パズルを一つ一つ解いていくかのような感覚で、一つ一つの音符を配置していくということを行っていた。

昨日の作曲実践の中で、転回形を積極的に使おうという明確な意図があったため、もう一度音楽理論のテキストを紐解いてみると、第一転回形から第三転回形の特徴とその作り方がようやく明瞭なものになった。これまでは、転回形を作る際に、いちいち本書を参照しなければならなかったが、

今回転回形の規則性を掴むことができたため、その規則性を元に比較的自由に転回形が作れるのではないかと考えている。

昨夜も少しばかりバッハが残した楽譜を眺めていた。フーガの最初の作品を聴いた時、いつもながらにバッハの作曲技術に対して感銘を受けた。数日前にバッハの楽譜を参照していた時、トリルという演奏記号をなんとか自分の曲の中で活用できないかを考えていた。実際に、何度も自分の曲中で試してみたが、いまいちうまく機能しない。トリルがうまく機能する前提条件は一体なんだろうか。

その問いに対して、いくら概念的に考えても解決できないであろうから、今日はこの問いを携えて作曲実践に臨み、曲中でトリルを試してみることによって、その前提条件を自分なりに解き明かしていきたいと思う。おそらく、トリルに関しても、その背後には理論のようなものがあるはずだ。作曲に関する正式な教育を受けていない私は、こうした理論を自分なりの方法で掴んでいく必要がある。もちろん、理論書を紐解くことも有益な手段になるだろう。だが、それだけではなく、むしろそれ以上に、自分なりの問いを絶えず持ちながら、実践を通じて理論を掴んでいくことを心がけたい。2017/11/5(日)06:47

No.385: Privilege

Like the other course I am taking in this block, I was the only student in the course that began from today. I am very lucky and fortunate to take a course like a one-on-one tutoring.

I am very privileged to have a lecture from experienced professors. I expect to learn very much in this block through almost private lectures. 21:02, Wednesday, 11/15/2017